

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第180号

イザヤ 65:1

平成22年9月24日

あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。あなたの受ける分を七人か八人に分けておけ。地上でどんなわざわいが起こるかあなたは知らないのだから。雲が雨で満ちると、それは地上に降り注ぐ。木が南風や北風で倒されると、その木は倒れた場所にそのままにある。風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない。あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたはいっさいを行われる神のみわざを知らない。朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいくかもわからない。……人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。すべて起こることはみな、むなし。

若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。だから、あなたの心から悲しみを除き、あなたの肉体から痛みを取り去れ。若さも、青春も、むなしだから。あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。その日には、家を守る者は震え、力のある男たちは身をかがめ、粉ひき女たちは少なくなって仕事をやめ、窓からながめている女の目は暗くなる。通りのとびらは閉ざされ、臼をひく音も低くなり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちはみなうなだれる。彼らはまた高い所を恐れ、道でおびえる。アーモンドの花は咲き、いなごはのろのろ歩き、ふうちょうぼうは花を開く。だが、人は永遠の家へと歩いて行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。こうしてついに、銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉のかたわらで砕かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。空の空。伝道者は言う。すべては空。 伝道者の書11～12:8

「空の空 伝道者は言う。すべては空」で始まり締めくくられている「伝道者の書」は、神の御旨に従って生きない人生の空しさを、この世の富、知恵、名声、地位、国家、繁栄のすべてを我がものとしたソロモン王が切実に訴えているメッセージです。ソロモンが訴えた何ともむなし人生は、キリストが招かれた生命にあふれる人生「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに保つためです」（ヨハネ10:10）とは大違いで、「死」に向かったの空しい徒労、目的のない旅路でした。「日の下」の人生の目的を自分の知恵、経験を通して理解しようとしたとき、当時、国内外のだれよりも知恵にまさっているとされたソロモンでしたが、この世の現象を限られた視点でしか見通すことはできず、たどり着いた結論は人生の空しさでした。しかし、年老いて、「日の上」に存在するものに気づいたとき、そのとき初めて、神の御目的に照らして見る人生の意義、人の視点からではなく神の視点から「日の下」にあるものを正しく捉えることができたのです。

冒頭に引用した箇所は、よく宣教を奨励するメッセージとして用いられますが、ユダヤ教の教師ラビたちの間では、不特定多数の見知らぬ者たちへの慈善の勧め、寛大な心で持てるものを分かち愛の施しが報いられずに終わることはないとの教えとして捉えられています。「パンを水の上に投げる」は意識すれば「船で穀物を送る」で、ヒラムやタルシシュの船団を持ち、貿易商人と金銀、象牙、動物、穀物などを取引していたソロモンは、慈善を報いを望まず全地に広めるイメージを頭に描いて、交易用語を用いたようです。船が商品を満載して戻ってくるには、数カ月かかります。今日でもそうですが、当時であればなおさらのこと、気象、環境を左右することができないため、穀物を生産する農夫にも商いをする商人にも船が無事に戻り、交易が成功する保証はありません。不安から解放され、勤労が報われるには、数ヶ月間の大変な忍耐と信仰が必要です。途中で、船が座礁したり、嵐に見舞われたり、海賊に襲われたりするかもしれないし、あるいは、穀物が虫害、干ばつ、冷害で予定通り収穫できなかったりと、予測できない災いは憂えればきりがありません。しかし、商人と農夫が環境や気象条件が整うまで仕事を遅らせたとしたら、おそらくいつまでたってもそのときは来なかったでしょう。人生とはまさにそのようなもので、リスクのない人生はなく、決断して前進しなければならぬときが必ず訪れるのです。

ここでソロモンは、富、将来設計に対する賢明で地道な管理を教えています。人は未来が分からないことを言い訳にして、恐れ、不安から何もせず、怠惰、無責任な人生に逃避すべきではなく、分からないからこそ、未来に対して積極的に計画し、今すべきことに取り組まなければならないとの警告です。それは、一つの道だけでなく、いろいろな道を賢く備えること、すなわち「あなたの受ける分を七人か八人に分けておけ」という勧めに

表現されています。一瞬先何が起こってもいいように、未来のために賢く生きること、前もって幾つかの道を備えておく勧めは「不正(この世)の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなるとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです」(ルカ 16:9)と、キリストもたとえの中で語られたことでした。何が起こるか分からない人生の危機管理についてこの世的なアドバイスはたくさんあるようですが、聖書は、そのときが訪れる前、今、身の回りの整理整頓をし、不必要なものを除き、最小限必要なものだけを残し身軽にしておくこと、欠けの償いにいつも注意を払い、霊の武具で身固めをし、すべての道に備えておくことを教えています。与えられたもので満足することを覚え、借金に追われない生活も使徒パウロが勧めたことでした。それは、背後に神の守りがあることを確信している者は安心して未来のすべてを神に託すことができるからで、エリヤの例から学ぶことができます。列王記第一 17:1-16には、神が預言者エリヤを三年半の干ばつによる飢饉の間、不思議なご介入で支えられたことが記されています。エリヤは川の水と、毎日朝夕、幾羽かのカラスがどこか遠方の飢饉を免れた地域から運んできたパン、肉はじめ、おそらく、果物、木の実などで養われたのでした。神は、このような苦境、窮乏を通して、エリヤに日々神に依存すること、神の愛の備えを感謝すること、「満ち足りる心を伴う敬虔」(テモテ第一 6:6)を学ばせたのです。しかし、信仰の歩みはすぐに状況が好転することによって報われるとは限りません。干ばつが続いたためついに川も枯れ、むしろ状況は悪化します。しかし、エリヤの未来を保証し、すべてを支配しておられた主は、エリヤの信仰をますます建て上げ、エリヤの霊の目、耳を開き、行くべき道を示されました。主は、エリヤを一人のやもめに養わせることを望まれ、苦境の中で、信じる者同士が主にある交わりを通して、お互いに助け合うことを願われたのでした。

理想的な状態になるまで待つ言いつけの人生ではなく、たとえ逆境にあっても、信仰を持って主の御旨、「自分を捨て、自分の十字架を負い」(ルカ 9:23)主に従う道一歩を歩み出すとき、すべてに神の「とき」があり、神の御旨が必ず成ることを知るようになるのです。手を用いて働き、「とき」を活かして勤勉であること、自分の肉のために蒔くのではなく、正義の種を蒔くことを聖書は一貫して「御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになりまし」(ガラテヤ人 6:8-9)と勧めています。人生は、信仰で今を神に投資し、未来に配当金を得る冒険の旅です。農夫のように、いろいろな所にさまざまな種を蒔き、信じて忍耐強く収穫のときを待つのです。

続く段落でソロモンは、若者たちに「老いの日」が暗闇とならないように、身体の機能を自由自在、思うように発揮させることができる今を正しく生き、十分に楽しむようにと忠告をしています。パウロの奨励の言葉「たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。また、人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように」(テモテ第一 6:17-19)には、このソロモンの忠告が反映されているようです。身体を滅ぼし、魂に永遠の裁きをもたらすことになる肉の罪に陥ることなく、心に神の平安を受け、若さを十分楽しむには、神の御旨に従って生きる以外にないことを若者たちは知らなければならないのです。パウロの奨励「今は恵みの時、今は救いの日…いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖さを全うしようではありませんか」(コリント第二 6:2-7:1)は、未来に向かって歩む若者が「老いの日」を祝福で終えるために今、選ばなければならない道なのです。

ソロモンは、若い日に創造者を知ることなく肉の欲、自分中心に生きた者の老いの日を「何の喜びもない」災いの日として描いています。詩的で発想に富んだ「老いと死」の描写は古びた家の崩壊にたとえられており、鋭い視点は不気味なほどです。家事を担っていた者たちの手は震え、力に満ちていた男たちの足、ひざ、肩は衰え、身をかがめて歩き、女たちの歯は失われ、視野が狭められ衰えた目。聴力の衰えた、あるいは全く聞こえなくなった耳、咀嚼力の衰えた歯、浅い眠り、か細く力のない老人の声。高い所を恐れ、道を歩くにも転ぶのを恐れ、前に進めず、わずかな髪は春に咲くアーモンドの花のように真っ白で、夏の終わりに身体を引きずっているいなごのようなのろのろ歩き。食欲、すべての意欲は失われ、近づきつつあるのは人生の終着点「永遠の家」。

周りの人たちはその死を悼み悲しみます。天井から銀のひもでつるされた金の器、明かりのひもが切れて器が砕かれるように、かよわい「生命のひも」がプツンと切れて、生命の光が消えます。このような高価な明かりを所有することができたのは裕福な者たちだけでしたから、この象徴を用いることによってソロモンは、身分に関係なく死がだれにも訪れること、だれも避けて通ることはできないことを強調したかったかのようです。また、ここには水が満ちた水がめを滑車で巻き上げる井戸が描かれていますが、ある日、その滑車が壊れ、水がめが砕かれる日が容赦なく訪れます。水の泉は、古代では「生命」の描写でした。人の生命の機構が機能しなくなると、身体を流れる生命の水も止まるのです。心臓は鼓動をやめ、血の循環は止まり、死の訪れです。霊は身体を離れ、造り主なる神の許に帰りますが、身体は腐敗が始まり土に帰すのです。「いのちの水はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです」(詩篇 36:9)と、若い日に造り主を覚えた人生を歩まず、災いの日、死を迎えた者を、ソロモンは「空の空、伝道者は言う。すべては空」と警告しているのです。